

Title	「日常」の社会学 : 日常生活の世界と理解社会学
Author(s)	浜, 日出夫
Citation	年報人間科学. 1 P.113-P.126
Issue Date	1980
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5843
DOI	10.18910/5843
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

「日常」の社会学

日常生活の世界と理解社会学

浜 日出夫

序

アルフレッド・シュッツの社会学は、しばしば「日常生活の社会学」とよばれるように、人間の生における「日常」という次元を社会学においてはじめて主題化したものであった。この「日常」という理念は、シュッツが社会科学の公準としてかかげた「主観的解釈の公準」とともに、エスノメソドロジーに代表される一群の主観主義的な社会学の旗印となった。それらは、「日常」を人間の「主体性」がいわば無垢な形であらわれる次元とみなし、社会は「日常」における人間の主観的な意味付与によって構成されると主張する。そして、社会学の課題とはこの意味付与を主観的に、すなわち行為者の動機から解釈することであるとみなされる。こうした見解に対しては、しばしば妥当な次のような批判、すなわち、これらの社会学は、人間の「主体性」に比較的自由な余地がみとめられる対面状況に分析を限定したミクロ・ソシオロジーであり、社会学の課題を動機理

解に還元するものだという批判がなされる。だが、これらの社会学はシュッツの「日常」の理念の一面的な把握にもとづくものである。「日常」とは、対面状況大の現象ではなく、人間の生のもっとも普遍的な枠組をなすものであり、「主体性」にとってつねに前もって与えられており、あらゆる意味付与の基礎にあるものである。本稿は、シュッツにおける「日常」の理念を、とくに人間の主観的な意味付与とのかわりに留意しながら再構成することを目的とする。またそれとともに、「主観的解釈の公準」の射程を再検討することによって、「日常」という視角をとる社会学の意義を明らかにしたい。

I アルフレッド・シュッツの思想の基本枠組

アルフレッド・シュッツの思想は二つのライトモチーフからなりたっている。すなわち、「社会科学の基礎づけ」というモチーフと「日常生活の世界」というモチーフである。この二つのモチーフの独自な結合がシュッツの思想の特徴をなしている。まず、この二つのモ

チーフがどのようにシュッツの思想世界を形作っているのかをみることにしよう。

「社会的世界にかかわるあらゆる科学の主題は、主観的意味、連関、一般ないしは特定の主観的意味、連関についての客観的意味、連関を構成することである。したがって、あらゆる社会科学の問題は、主観的意味、連関、一般についての科学はいかにして可能かという問いに集約できる」⁽³⁰⁾。

シュッツを導いていた第一のモチーフは「社会科学の基礎づけ」である。社会科学が対象とする世界は有意義な世界であり、この点で自然科学が対象とする自然の世界から区別される。だが、社会的世界が有意義であるのは、行為者が主観的意味を結びつけて行為をおこなうかぎりにおいてである。この行為者の主観的意味を社会科学の主題として確立したのは、周知のとおり、マックス・ウェーバーの理解社会学であった。

「あらゆる文化科学の先験的な前提は、……われわれが意識的に世界に対して態度をきめ、世界に意味を付与する能力と意志とをさすけられた文化人間である」というところにある」⁽³¹⁾。

ウェーバーは、「民族」や「民族精神」——さらにその背後に見え隠れする「神」——と不明瞭な形で結びつけていたロマン主義的な

人間像に対して、人間をそれらからラティカルに断絶させる。ウェーバーは、人間を超越する意味をもつとされたあらゆるものは、人間の意味付与が投影された虚像であることを暴露し、それらから意味付与の権利を剝奪し、それを人間の意味付与の能力と意志につきかえす。社会的世界における現象が有する意味とは、この人間の主観的な意味付与に根拠をもつのである。こうして、ウェーバーは、意味を付与し文化を創造する人間を前提として、自己の学問の準拠点を人間が主観的意味を結びつけておこなう行為にすえた。

シュッツは、社会的世界における現象の基盤を「主観的意味」に求めるこのウェーバーの理解社会学の構想を基本的に正しいものとみとめる。だが、シュッツは、「主観的意味」とはその背後にあるさまざまな問題の省略的表現であるとみなす。

「彼〔ウェーバー〕の社会的世界の分析は、社会的生起の要素が見かけ上もうそれ以上還元できない、あるいは還元する必要のない形であらわれる層でとまってしまう。だが、理解社会学固有の基本概念である、個人の有意義な、したがって理解可能な行為という概念は、けっして社会的生起の真の要素を一義的に確定したものではなく、さらにつつこんだ分析を必要とする、多岐にわたるプロブレマティークの表題にすぎない」⁽³²⁾。

人間はカオスから意味を創造するわけではない。人間の意味付与はある潜在的な意味の世界を背後に前提としている。「主観的意味」

とは、この潜在的な意味の世界が主体のうちで顕在化し、結晶したものにほかならない。そして、この潜在的な意味の世界とは「日常生活の世界」である。日常生活の世界こそあらゆる意味付与がそこから生じ、そこへかえっていく根源的な意味の世界である。こうしてシュッツは、理解社会学の出発点を、行為者の主観的意味から、その背後にあつてそれを包みこんでいる日常生活の世界まで押し戻した。

だがさらに重要なことには、社会科学に固有の理解という方法自体、この日常生活の世界に由来するのである。ここにおいて、「社会科学の基礎づけ」というモチーフは、「日常生活の世界」というシュッツにおけるもうひとつのモチーフに結びつく。

ウェーバーの学問論における努力は、理解を科学的方法として確立することにむけられていた。人間の行為は、行為者が主観的意味を結びつけたものであるかぎり、理解することができ、この点で自然の出来事から区別される。だが、このことは理解という働きをなら非合理的で神秘的な領域におしこめるものではない。ウェーバーは理解を感情移入・追体験・直観などの心理過程と同一視する心理主義的な見解をしりぞける。そうした見解は、理解が明証性をともなつてあらわれることから、それを、概念形成など必要としないう、したがつて経験的認識とはまったく種類の異なる認識作用であるとなしなしていた。だが、ウェーバーは理解を科学の領域の外におこうとはせず、それを科学のなかにとりこもつとする。なぜなら、行為についての経験科学としての理解社会学の成否はそのことにか

かっていたからである。だが、理解もまた、経験的に妥当する成果に到達するためには、概念(理念型)の形成を経なければならぬ。こうしてウェーバーは、理解を心理過程から切り離し、理念型の構成に結びつけることによって、それを科学的方法へと昇華した。

だが、シュッツは、社会科学の認識の問題は理解を方法化するこゝとによつては片付かないことに気づいていた。なぜなら、理解は一個の科学的方法である以前に、日常生活の世界における人間の経験の根源的な様式にかかわるものだからである。社会科学が理解しようとする社会的世界は、社会科学による理解に先立って、そこで生活している人間によつてすでに理解されているのである。

「あらゆる社会科学にとつて対象は前もつて与えられており、この対象は前科学的段階においてすでにあの意味と理解という要素を含んでいるという特徴をもっている」⁶⁹。

こうしてシュッツは、理解の問題を、一個の科学的認識の方法の問題から日常生活の世界における前科学的的生活の問題にまで拡大した。だが、社会科学の方法が前科学的な日常生活の世界に由来するものであるということは、社会科学の基礎づけは、もはや新カント派流の方法論の枠内ではおこなえないということの意味している。社会科学の認識の問題は、主観的意味連関(日常生活の世界)と客観的意味連関(科学)という二つの意味領域にまたがるものであり、したがつてそれは日常生活の世界から切り離して答えられるもので

はなく、この二つの意味領域の間の関係の解明を必要としている。社会科学はいわば日常生活の世界を「地」として浮かびでている「図」であり、「主観的意味連関についての客観的意味連関はいかにして可能か」という社会科学の根本問題は、日常生活の世界の現象学的分析を必要としているのである。シュッツにおいて、「社会科学の基礎づけ」と「日常生活の世界」とは一体をなしている問題であつたといえる。こうしてシュッツは、理解の方法化というウェーバーのつた方向をふたたび逆転して、理解という方法の始源へとむかう。そしてそののちに、理解社会学の射程と意義は再定式化されることになる。

「この考察の出発点と到着点が、社会的世界の構造連関を深く追求したあの人物、つまりマックス・ウェーバーの仕事であるといふことは、なにか偶然のことではなく、事柄の本質にもとづいているのである」(10)。

II 日常生活の世界における理解と行為

日常生活の世界とは、人間が自然的態度において自明なもののみなしている世界である。この世界は単に事物の集合としての世界ではない。それは理解されたものとして有意義な世界である。人間はいつでもこの意味の世界のなかに自己を見出し、あらゆる意味付与はこの世界のなかで生じる。まず、日常生活の世界において、人間

が世界をどのように理解するのか、また世界に対してどのように行為するかをみることにしよう。

日常生活の世界には、自然の事物も人間の行為も含まれている。まず、自然の事物の解釈についてみてみよう。シュッツにしたがつて「理解(主観的解釈)」ということばは人間の行為について用いることにし、自然の事物や出来事を対象とする広義の「理解」は「解釈」とよぶことにする。さて、あらゆる事物の解釈は「知識ストック」にもとづいておこなわれる。知識ストックは過去のすべての経験の沈澱物としてつねに解釈者の手もとにある。この知識ストックが解釈図式として用いられるのである。だが、いかなる事物も個性的で独自なものとして解釈されるのではない。すなわち、ある事物の解釈とは、その事物を、知識ストックのなかにある過去の同種の事物についての経験に還元することによっておこなわれる。解釈とは、未知のものを既知のものに還元することなのである。解釈がある事物の同種の事物への還元という形でおこなわれるといふことは、いいかえるなら、事物はその「類型性」において解釈されるということである。なぜなら、解釈にあたっては、あらゆる個性的な特徴にいたるまで「同じ」事物が必要とされるわけではなく、「類型的に同じ」事物への還元で十分だからである。解釈とは、事物や出来事がある類型の事例として還元することだといえる。ウェーバーが社会科学に導入した「理念型」とは科学の領域に固有のものではなく、前科学的的生活における広義の理解がすでに類型に結びついているのである。科学的類型に固有の特徴、および科学的類型と前科

学的類型の關係については次節でみることにしよう。

「いわゆる構成型とか理念型の起源は日常生活の常識的思考のうちにあるとみなされる」⁷⁰⁾。

だがさて、解釈される事物はけっして単独で存在しているわけではない。それは潜在的な地平をともなっている。たとえば、〈私〉が「犬」として解釈する事物は、実は「野原」ではえており、「野原」の背景にはさらに「山」がある。そして、これらはさらに「自然」の世界の一部である。世界とは、さまざまな地平が互いに関連し合ひ、重なり合いながら構成する全体的な地平である。そして、日常生活の世界とはあらゆる地平を包括するもつとも普遍的な地平である。あらゆる事物はこの地平のなかにあり、あらゆる事物の解釈はこの地平を背景に前提としている。そして、〈私〉がある事物を解釈しているときには、この地平はいわば潜在している。たとえば、〈私〉が次に「虫」の声に耳をかたむけると、「犬」は存在しなくなるのではなく、今度は「虫」の背景として潜在するのである。逆にいえば、人間はある事物を解釈することによって「虫」を創造するわけではなく、潜在していた意味を顕在化させるのである。解釈とは、潜在的な意味の世界のなから、そのときどきの関心、有意性にしたがってある意味を顕在化させることだといえる⁷¹⁾。

だが、事物はある類型の事例として還元されることによって解釈されるといふことは、世界には「新しい」事物や出来事は存在しな

いということの意味しているわけではない。ただ、ある出来事が「新しい」といふことも類型的な世界の地平のなかではじめていえることである。つまり、ある出来事を知識ストックのなかにある既成の類型に還元することに失敗したときに、その出来事は「新しい」といわれるのである。そして、その場合には、その出来事は単に非類型的なものとして無視されるか、あるいは知識ストックの構造に変動をもたらし「新しい」解釈を生み出すかである。

だがさて、ある事物は〈私〉にとつて「犬」であるばかりでなく、他の人間にとつても「犬」である。(ここでは〈私〉にとつて「犬」であるものが他の人間にとっては「ポチ」であるという問題は別にしておこう。それは有意性の問題にかかわる。)日常生活の世界はけっして〈私〉の私的な世界ではなく、間主観的な世界なのである。この世界の間主観性は、解釈のさいに用いられる知識ストックが社会化されていることにもとづいている。そして、知識の社会化において中心的な役割を果しているのは言語である。

シュッツによれば、知識は三つの側面で社会化されている。すなわち、第一は「視界の相互性^{パースペクティヴ}つまり知識の構造的社會化」の側面、第二は「知識の社会的起源つまり知識の發生的社會化」の側面、第三は「知識の社会的分配」といふ側面である⁷²⁾。

まず第一の側面をみることにしよう。すなわち、知識は「視界の相互性」にもとづいて構造的に社會化されている。〈私〉の世界も他の世界もそれぞれの「今、ここ」を中心として広がっており、〈私〉の世界も他者の世界もそれぞれの時間的および空間的パースペク

テイヴによって制約されている。空間的パースペクティブについていえば、同じ事物をみていても、「ここ」からみている〈私〉と「そこ」からみている他者とはちがう側面をみているのである。だが、〈私〉はその事物を解釈する場合には、このパースペクティブのちがいを無視することができる。つまり、〈私〉は〈私〉と他者が場所を交替すれば、他者も〈私〉と同じパースペクティブからその事物をみることでできると仮定している。シュッツはこの基本的な仮定を「視界の相互性の一般定立」とよぶ。

「この視界の相互性の一般定立……が、共通の事物の世界およびそれとともにコミュニケーションの前提である」(100)。

さらにこの「視界の相互性の一般定立」は言語によって確認される。すなわち、〈私〉がある事物を「犬」と命名するとき、〈私〉は、その事物をちがったパースペクティブからみている他者にとつても、またそれをまったくみていない他者にとつてさえそれは「犬」であるとみなしている。言語による命名によって、それぞれのパースペクティブに制約された私的な経験はその孤独性から解放され、公的な「われわれ」の経験となるのである。また生活史のちがいに由来する時間的パースペクティブについても同様にいえる。つまり、〈私〉はある事物を「犬」と命名するとき、生活史を異にする他者にとつてもそれは「犬」であるとみなしている。

第二に、知識は社会的な起源をもつものであることによって発生

的にも社会化されている。

「世界についての〈私〉の知識のうちで、〈私〉の個人的な経験に由来するものはそのごく一部分にすぎない。大部分は社会的な起源をもつもの、つまり〈私〉が友人や両親や教師やそのまた教師からうけついただものである」(100)。

人間はいわばすでに類型化された世界に生まれてくる。そして、人間は言語の学習を通じて世界を類型的に解釈する仕方を学ぶ。

「前科学的な日常言語は、前もって構成された既成の類型の宝庫として解釈できる」(120)。

人間は、言語を媒体として、世界を解釈するためのさまざまな既成の類型を知識ストックに組み入れる。したがって、同じ言語共同体に育つたものにとつて「犬」という類型はおおよそ同じ用法をもっていると考えることができる。

知識の社会化の第三の局面は「知識の社会的分配」という側面である。これは知識の「担い手」の問題にかかわる。ある社会で通用している知識はその成員に分配されているわけではなく、知識ストックは人によって異なる。人間は特定の知識領域に対する「親和性」のちがいによって「専門家」と「素人」に分けられ、誰しもある領域の「専門家」であり、他の多くの領域については「素人」で

ある。(ここでは知識の社会的分配と支配との関係については触れられない⁽¹³⁾。)だが、知識ストックには知識の社会的分配についての知識、すなわち誰がどの領域の「専門家」であるかについての知識も含まれている。人間はあらゆる類型を知識として持っている必要はなく、自分もっていない類型については、その担い手が誰であるかを知っていれば事足りる。世界は自分にとって直接解釈可能な領域だけからなるのではなく、さらに他者にとって解釈可能であり、したがって自分にとって間接的に解釈可能な領域へも広がっているのである。

このように三重に社会化された知識ストックにもとづいて解釈をおこなうことによつて、人間は一個の間主観的な日常生活の世界に参加する。解釈とは閉ざされた主観性のうちで生じるのではなく、日常生活の世界という間主観的な地平のなかで生じるのである。そして、この間主観性への参加を保証しているのは言語である。

だが、人間は世界を受動的に解釈するだけでなく、世界に対して能動的に働きかけもする。これとともにわれわれは行為の問題へと進む。そして、行為もまた知識ストックにもとづいておこなわれる。解釈図式として用いられた知識ストックが、行為のさいには表現図式として働くのである。シュッツによれば、行為には必ず、その行為がもたらすと予想される結果——これが行為の「目的動機」である——が「未来完了時制」において前もって投企されていなければならない。シュッツは、ウェーバーによつて行為者が行為に結びつけるといわれた「主観的意味」とは、この前もって投企される行為

の結果にほかならないことを明らかにした。

「行為の意味とは前もって投企された結果としての行為 (Handlung) である」⁽¹⁴⁾。

だが、この投企される行為の結果とは、知識ストックのなかにある、過去に実際におこなわれた同種の行為の結果にほかならない。したがって、行為もまた類型的におこなわれるのである。行為とは既知のものを未知の領域に投企することだといえる。

だが、行為が知識ストックにもとづいておこなわれるということとは、行為もまた潜在的な地平のなかでおこなわれるということを中心として、手段として用いられる事物、行為の遂行の条件となつたり障害となつたりする事物、行為の遂行がもたらす副次的な結果にかかわる事物、さらに当面行為の遂行に無関係と思われる事物というように、有意性の程度にしたがつて組織される。行為の「主観的意味」の背後にはこうした潜在的な地平が広がっているのである。

さらに、この潜在的な地平とは、先に述べたように、間主観的な地平である。行為は私的な宇宙の真空中で創造されるわけではなく、日常生活の世界という間主観的で潜在的な意味の宇宙のなかで生じるのである。したがって、——しばしばおこなわれることだが——行為の「主観的意味」を個人的で心理学的な動機とみなすことが誤りであることは明らかであろう。そうした誤りは「主観的」という

ことばの誤解にもとづいている。

『主観的』とはここでは行為が行為者の意識に対してもつ関係をさしている。それは内省とか、心理学的条件とか、私的な態度とかいった観念とはなんのかかわりもない⁽¹⁰⁾。

目的の投企がある意識の流れのなかで生じるという点ではそれは「主観的」であり、「主観的」以外ではありえない。だが、目的の投企はなんら私的で心理学的な出来事ではない。というのも、今述べたように、目的の投企は知識ストックにもとづいておこなわれ、この知識ストックは社会化されたものであることから、目的の投企は間主観的な地平をともなっているからである。「動機」とは、社会学的には、間主観的で潜在的な意味が、主体によって顕在化させられたものとみなされるべきである。人間の「主体性」とは、カオスのなかに意味を創り出すところにあるのではなく、日常生活の世界という間主観的な世界に潜在している意味を、へ理解—行為」というプロセスによって顕在化させるところにあるのである。しかも、このプロセス自体類型化されたものであることから、人間の「主体性」は「類型性」に接続されることになる。人間は「主体的」であるがゆえに類型的に行為するといえる。ウェーバーの理解社会学がすでに、自由なるがゆえに合理的に行為する人間像のうえになりたつていたのである⁽¹¹⁾。

だが、行為が類型的におこなわれるということは、「新しい」行為

の可能性を排除するわけではない。「新しい」行為もまた、「新しい」出来事の解釈の場合と同様、類型的な行為を前提としてはじめて可能なのである。

さて次に、人間の行為の主観的解釈、すなわち真の意味での理解に進むことにしよう。人間の行為は、今述べたように、単なる身体の運動ではなく、行為者が主観的な意味を結びつけたもの、つまり目的の投企を含むものである。すなわち、人間の行為は事実的な外的経過と主観的な意味付与という二重性をもっている。だがこのことは行為の理解になんら神秘性を帯びさせるものではない。行為の理解も基本的には自然の事物の解釈とまったく同じ形で、すなわち知識ストックへの還元という形で類型的におこなわれる。ただし、行為の理解は人間の行為がもつ二重性に応じて二段階のプロセスを経ておこなわれる。

まず、行為の外的経過が、知識ストックのなかにある、過去に経験された同種の経過の類型——シュッツはこれを「行為経過類型」とよぶ——に還元されることによつて解釈される。ここまでは自然の事物の解釈と同じである。だがさらに、行為の外的経過の背後にある主観的意味に目をむけることができる。これによつて、人間の行為の解釈に固有な主観的解釈の段階、すなわち理解の段階に進む。理解は、行為の外的経過にその行為を導いた動機を結びつけることによつておこなわれる。だが、ここで注意しなければならぬことは、他者の動機そのものをなにか神秘的な手段でとらえることが問題になっていないということである。目的の投企が知識ス

トックにもとづいておこなわれ、知識ストックが過去の経験の沈澱物である以上、生活史を異にする者には、他者の動機そのものを理解することは不可能である。

「『思われた意味』とは本質的に主観的なものであり、原理的に体験者の自己解釈と結びついている。それはあらゆる他者にとつて近づくことのできないものである。というのも、それは各自の意識の流れのなかでのみ構成されるものだからである」⁽¹⁹⁾。

理解とは、自己の知識ストックからみて、その類型的な外的経過に適合的と思われる類型的な動機を結びつけることによって行なわれるのである。ここで問題になっているのは、ある類型的な行為をおこなう行為者の類型——シュッツはこれを「人間類型」とよぶ——がもつ類型的な動機である。人間の行為はこの「人間類型」に還元されることよって理解されるのである。そしてここでも、さまざまな既存の人間類型を与えてくれるのは言語である。「新しい」行為はこの既存の人間類型にもとづいて、単に非類型的（逸脱的）なものともなされるか、または「新しい」人間類型（カリスマ）によつて理解されるかである⁽²⁰⁾。

だが、自然の世界と同様、社会的世界も地平構造をもっている。すなわち、対面状況下にある「あなた」(Umwelt)の背後には、しだいに匿名性を増していく無数の「同時代人」(Mitwelt)がいる。まず、両親、友人などの特定の個人——シュッツはこれを「資質的

類型」⁽²¹⁾とよぶ——があり、そのむこうには鉄道員、郵便配達人などその類型的な機能によつて理解されるさまざまな役割遂行者——シュッツはこれを「習慣的類型」⁽²²⁾とよぶ——があり、そのむこうには株式会社、議会、国家などのさまざまな「社会集団」があり、さらに、法、文法、道具などの「文化客体」がある。また、この地平は「祖先」(Vorgewelt)、「子孫」(Folgewelt)へと歴史的にも広がっている。あらゆる人間の行為の理解は、こうしたさまざまな人間類型がおりなす社会的世界という地平を背景にもっているのである。

だが、こうした人間類型についての知識もまた社会化されている。そして、このことが社会関係を可能にしているのである。最後にこの社会関係の問題をみることにしよう。社会関係の場合には、投企される行為の目的は他者の行為をひきおこすことである。そのとき、行為者は、相手がこの自分の「目的動機」を理解すれば、この理解は投企された相手の行為をひきおこす「理由動機」となるだろうと仮定している。社会関係はこの「動機の相互性の理念化」⁽²³⁾のうえになりたっているのである。さて、他者にむけて行為をおこなう場合にもやはり、他者の行為の解釈図式として用いられた人間類型が表現図式として働く。つまり、 \langle 私 \rangle は他者の個性的で独自の動機に働きかけるわけではなく、 \langle 私 \rangle が他者をそれとして理解する人間類型に固有の類型的な動機に働きかける。たとえば、 \langle 私 \rangle は電車に乗るときには自分の行為を「鉄道員」の行為、すなわち「乗客」を目的地に運ぶ」に定位する。だが、このとき同時に \langle 私 \rangle は、「鉄道員」が \langle 私 \rangle をそれとして理解するであろう「乗客」として自分を「自

「已類型化」しており、「乗客」に類型的な行為、「目的地までの切符を買う」などをおこなう。そして、社会関係は、この「乗客—鉄道員」という一對の人間類型が双方において表現図式として用いられることによつてなりたつてゐる。この社会関係はさらに「鉄道公安官」、「旅行代理店」、「国鉄当局」などとの関係を背景としてもつてゐる。こうした社会化された知識にもとづく社会関係が、社会的世界を不断に再生産してゐるのである。そしてここでも、「新しい」理解と「新しい」行為による「新しい」社会関係（ゼクテ）が生まれる可能性はつねにある。

日常生活の世界は、あらゆる理解と行為がそのなかで生じる潜在的な意味の母体をなしている。そして、人間は、自然の事物や他者に対する（理解—行為）プロセスのなかで、この潜在的な意味を顕在化させる。日常生活の世界とは、潜在している意味を（理解—行為）主体が顕在化させ、さらにこの顕在化された意味が沈澱し、ふたたび潜在するという不断の意味の運動の場なのである²²⁰。そして、この意味の運動の中心にあるのは社会化された知識、とくに言語である。こうした意味の運動はふつうルーティン化されており、意識されることはないが、もつともラディカルな形であらわれた場合には、カリマスの出現—日常化というプロセスを経て日常生活の世界の意味構造を大きく変化させる場合もある。シュッツが社会学に導入したのは、まさにこの意味の運動の場としての日常生活の世界という理念であつた。だが、シュッツは日常生活の世界を唯一の意味領域とみなしてゐたわけではない。次に、もうひとつの意味領

域である科学の世界に考察を進めよう。

III 日常生活の世界と理解社会学

シュッツは人間の生を一元的なものとしてとらえることに反対し、それを多元的な意味領域からなるものとみなす。日常生活の世界はこの「多元的現実」のなかで、あらゆる意味付与の土台であることによつて「至高的」位置を占めてゐる。他の意味領域はこの「至高の」現実に対してマージナルな位置にたつ。そして、科学もまた宗教・芸術・狂気などとならんで周縁的な意味領域のひとつをなしている。だが、近代において日常に対するもつとも重要な対重をなしているのは、宗教に代わつて科学である。近代人を動かしているのは、この日常と科学という二つの意味領域の間のダイナミズムである。したがつて日常生活の世界と科学の間の関係、とくに日常生活の世界と理解社会学の関係をみることにしよう。

科学を日常生活の世界から区別するのは、その「論理的整合性の公準」である。すなわち、科学は形式論理学の原理にしたがつて類型を構成しなければならない。すでにみたように、類型とは科学の領域にのみ固有なものではなく、人間は日常生活の世界においてすでに類型を用いて自然の事物や人間の行為を解釈している。だが、日常生活の世界において用いられる類型は、実践的関心にとつて必要なだけの明晰明さをそなえてゐるだけであり、またそれで十分である。これに対し、あらゆる科学は形式論理学にもとづいて最大

限明瞭判明な類型を構成し、この科学的な類型によって前科学的類型をおきかえようとする。

だが、ここから自然科学と行為の科学のちがいがあらわれる。すなわち、自然科学にとつては、前科学的類型は文字通り「科学以前」のものとして消極的な意義をもつにすぎないが、これに対して、行為の科学は、対象を構成する重要な契機として、この前科学的類型を考慮に入れなければならない。なぜなら、この前科学的類型こそ、行為のさいに表現図式として働き、行為の主観的意味を構成するものだからである。人間の行為が事実的な経過と主観的な意味付与という二重性をもつものである以上、人間の行為をこの特性においてとらえようとする科学は、行為の主観的意味をなす前科学的類型に対する考慮を含まねばならない。これが理解社会学の「主観的解釈の公準」である。したがって、理解社会学が構成する類型とは、「日常生活の世界において行為を導いていた類型の類型、すなわち「二次的な構成物」である。このように、理解社会学は、行為の主観的意味をなしている前科学的類型についての科学的類型を構成することによって、日常生活の世界と科学という二つの意味領域を架橋する。これによって「主観的意味連関についての客観的意味連関」は可能になるのである。

だが、この主観的解釈の公準は、理解社会学を、しばしばそうみなされるような心理学的な動機についての科学にするわけではない。さきに述べたように、動機とはなんら心理学的なものでも私的なものでもなく、間主観的で潜在的な意味が、主体による「理解

行為のプロセスのなかで顕在化したものにほかならない。それは意味の運動における一契機である。動機とはこうしたものとして社会学の主題なのである。そして、動機がこうしたものとみなされる以上、理解社会学の射程もまた動機からさらにその背景にある潜在的な意味の世界全体へと広がる。理解社会学は日常生活の世界における意味の運動を全体として対象とする科学だといえる。このとき理解社会学の考察の焦点をなすのは言語である。なぜなら、言語こそ意味の運動の中心に位置していたものであり、それを理解する鍵だからである。事実、日常生活の世界における意味現象は広義の言語現象としてとらえることができる。すなわち、主体による意味の顕在化は、一種の発話、つまり潜在性としてのラングのパロール化とみなすことができるのである。だが、理解社会学は、パロール化の局面にもっとも大きな関心を寄せる点で、言語をモデルとするもうひとつの意味の科学、構造主義からも区別されなければならない。構造主義は、言語を閉じられた記号の体系とみなすことによって、意味がもつ運動という契機を見落とす。だが、意味とは、主体による不断の「理解—行為」プロセスをはなれて存在しうるものではない。

さて最後に、人間の生に対する理解社会学の意義という問題がのこされている。日常生活の世界と理解社会学の関係は、——シュッツ自身そのように考えていたふしがあるとしても、——前者による後者の検証という関係にはつきない。そうした関係は二つの意味領域がとりむすぶ関係のひとつの可能性にすぎない。理解の検証と

は、理解者の解釈図式と行為者の表現図式の一致を意味している。意味に関するかぎり、検証とは合意を意味するにすぎない。だが、理解 (Verstehen) は合意 (Einverständnis) を生み出すとはかぎらない。こうした合意、つまり双方の図式の一致は、さきに述べたように、社会関係の成立のための条件ではあっても、認識のための原理とはいえない。理解社会学とは単なる社会関係のための技術ではないのである。

日常生活の世界における理解は、シュッツによれば⁽³⁾、プラグマティッシュに制約されている。それは、相手に対して行為をおこなない、相手の行為をひきおこすために必要な射程をもっているにすぎない。そこでは、顕在化している動機のみが問題であり、その背後にある潜在的な意味の世界は自明なものともみなされていない。そして、社会関係に支障が生じないかぎり、この潜在的な意味の世界が問われることはない。これに対して、理解社会学は、今述べたように、顕在化した動機をこえてさらにこの社会関係をなりたたせている自明視された土台そのものを問おうとする。ここにおいて、理解社会学と日常生活の世界の間には、まさに合意ではなく緊張が生まれる。理解社会学は、その理解の射程によって日常生活の世界の自明性をゆさぶるのである。理解社会学は、意味の運動を全体として問うことによつて、この意味の運動のなかで営まれる人間の生をたえず活性化させるものだといえる。

結び

シュッツの「日常生活の社会学」は、「日常」という次元を導入することによつて、ウェーバーの理解社会学を意味の運動に関する学問に仕立て直したものであったといえる。最後に、同じくウェーバーを継承したパーソンズとの関係についてすこし述べておきたい。

両者の関係は、しばしばいわれるような、シュッツは「人間による秩序の形成」という側面をあつかい、パーソンズは「秩序による人間の形成」という側面をあつかったというような補完的な関係とみなされるべきではない。両者はそれぞれ完結した社会学の形成をめざしていた。両者のちがいは、社会秩序の根拠として、それぞれウェーバーからなにを継承したのかという点にもとめられねばならない。周知のとおり、ウェーバーは「価値自由」の要請によつて、「文化人間」の二つの要素として、「価値」と「経験的知識」を区別した。そして、パーソンズとシュッツは、社会秩序の源泉として、ウェーバーからそれぞれ「価値」と「経験的知識」を継承したのである。すなわち、パーソンズは「価値」を共有シンボル化することによつて、またシュッツは、「価値」は「有意性」として個人に帰したものの、「経験的知識」を社会化することによつて、それぞれ秩序の問題を理論に組み入れた。そして、この両者の社会学理論は、それぞれ「システム」の社会学および「日常」の社会学として結実した。パーソンズとシュッツの関係は、「システム」と「日常」というこの

二つの社会像の間で問われなければならない。シュミットの「日常」の社会学は未完成のままに終わったが、今日でも「日常」という理念がもつポテンシャルティが失われてしまったわけではない。否、むしろ「意味」「理解」「言語」「コミュニケーション」といった問題が緊急の課題となっている今日これらの現象の基盤にある「日常」の理念の重要性はますます増大しつつあるといえる。

- (1) 「主観的解釈の公準」の批判としては、山口節郎「解釈学と社会学——『解釈的パラダイム』批判——」一九七九年『思想』六五九号岩波書店参照。
- (2) Alfred Schutz, Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt: Eine Einleitung in die verstehende Soziologie, 1974(1932), Suhrkamp, Frankfurt am Main (以下 Aufbau と略す), S. 317
- (3) Max Weber, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, 4. Auflage, 1973(1922), J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, S. 180 (徳永恂訳「社会科学および社会政策的認識の『客観性』」『ウェーバー・社会学論集——方法・宗教・政治——』青木書店 四〇—四一頁)
- (4) Schutz, Aufbau, S. 15
- (5) ibid. S. 18
- (6) ibid. S. 23
- (7) Alfred Schutz, Concept and Theory Formation in the Social Science, 1954 (以下 1954 と略す), in: Maurice Natanson (ed.),

Collected Papers I, 1973 (1962), Martinus Nijhoff, Hague (以下 CP I と略す), p. 61 (松井清訳「社会科学における概念構成と理論構成」『社会学理論と哲学的分析』弘文堂三九頁)

- (8) 日常生活の世界を潜在的な意味の世界と規定したものととして
 - † David M. Rasmussen, Symbol and Interpretation, 1974, Martinus Nijhoff, Hague (久米博訳『象徴と解釈』紀伊国屋書店) 参照。以下第一章

- (9) Alfred Schutz, Common-Sense and Scientific Interpretation of Human Action, 1953 (以下 1953 と略す), in: CP I, pp. 11 - 15
- (10) Alfred Schutz, Symbol, Reality and Society, 1955, in: CP I, p. 316
- (11) Schutz, 1953, in: CP I, p. 13
- (12) ibid., p. 14
- (13) 知識(言語)の社会的分配と側面から正当性の問題を扱った Claus Mueller, The Politics of Communication: A study in the political sociology of language, socialization and legitimation, 1975, New York: Oxford University Press (辻村明・松村健生訳『政治と言語』東京創元社) 参照。
- (14) Schutz, Aufbau, S. 79
- (15) Maurice Natanson, Introduction, in: CP I, p. xxxix
- (16) 「行為の『自由』と歴史的生成の非合理性とはいやしくもなにかある一般的な関係にあるときには、いかなる場合にも一方の存在あるいは増大が他方の増大を意味するという相互规定的関係にあるのではない、まさに反対の関係にあるのである。」 Weber, op. cit., S. 69 (松井秀親訳『ロッシェヤーとクニース』(1) 未来社 一四—一五頁)
- (17) Schutz, Aufbau, S. 140

(8) 「新」の行為の解釈にめぐって Philip Pettit, *The Life-World and Role-Theory*, in: Edo Pivcevic' (ed.) *Phenomenology and Philosophical Understanding*, 1975, Cambridge University Press (拙訳「生活世界と役割理論」『現代思想』六卷一三号青土社) 参照。

(9) Schutz, *Aufbau*, S.277

(10) *ibid.*, S.277

(11) Schutz, 1963, in: CP, p.23.

(12) シュッツが日常生活の世界を意味の運動の場としてとらえたことを評価するものとして Walter L. Birkhngs.) *Verstehen de Soziologie*, 1972, München 参照。「シュツミソロギベ」の修正、すなわち、静的に把握された主観・客観の対立から主観化と客観化のプロセスとしての均衡 (prozessuale Balance von Subjektivierung und Objektivierung) への修正は、経験的な志向をもつ理解社会学にとって変わらぬ価値をもつものである」(S.25)。

(23) 理解社会学の課題と言語分析と規定するものとして Peter Winch, *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, 1958, Routledge & Kegan Paul, London (森川真規雄訳『社会科学の理念——ワイトゲンシュタイン哲学と社会研究——』新曜社) 参照。現象学と分析哲学という立場のちがいがいこそあれ、シュツとワインチの理解社会学批判はともに、理解社会学の展開の方向として言語をまじ示している。

(24) シュツは、社会科学の第三の公準として「適合性の公準」をかかげている。「人間の行為の科学的モデルにおける各項目を構

成する場合には、生活世界の個性的な行為者が、そうした典型的構成物によって示されるような仕方でおこなう行為が、行為者自身にとっても、彼の仲間にとっても、日常生活の常識的解釈によって理解可能であるように構成しなければならない。この公準との一致によって、社会学者の構成物と社会的現実についての常識的経験の構成物との整合性が保証される」(Schutz, 1953 in: CP, p.44)。「シュツの実証主義的な科学観を批判したものに Robert A. Gorman, *The Dual Vision*: Alfred Schutz and the myth of phenomenological social science, 1977, Routledge & Kegan Paul, London 参照。

(25) Schutz, *Aufbau*, S.49